

文化庁

「令和5年度文化芸術による子供育成推進事業—コミュニケーション能力向上事業—」

＜NPO 法人提案型＞

**子供たちの創造性やコミュニケーション能力を育むための
ダンス体験ワークショップをおこなう学校を募集します。**



(左：滋賀大学教育学部附属特別支援学校 (R1) 右：滋賀県大津市立唐崎中学校 (R4) アーティスト：北村成美、鈴木英理子)

NPO 法人 JCDN(ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク)は、京都市内に事務局を置き、アーティストとともに全国各地へダンスを届ける活動を行っています。教育に関わる活動では、これまで、文部科学省の同事業や行政からの委託を受けて、アーティストが小・中学校へ出向いて行うワークショップのコーディネート、教員向けのダンス教材開発などを行っています。からだを使ったコミュニケーションや創作方法である“ダンス”を通じて、一人一人の個性を引き出し、生きる力を養い、多様な価値観や他者との協同などについて学ぶことを推進しています。

H28-R4 年度、文部科学省(令和元年より文化庁へ移行)の当該事業を大津市内 9 校で実施しました(仰木の里東小学校、堅田小学校、下阪本小学校、伊香立中学校、北大路中学校、志賀中学校、南郷中学校、唐崎中学校、滋賀大学教育学部附属特別支援学校 ※複数年実施した学校含む)。本年度から、滋賀県内の小中高等学校に対象範囲を広げて、下記の通り、実施希望校を募集します。ぜひこの機会にご応募ください。

記

1. 派遣アーティスト

学校側の希望と可能なスケジュールをお聞きし、関西のダンスのアーティストの中から、経験が豊富で信頼のできるアーティストを、JCDN(コーディネーター)が推薦し、各学校と相談の上決定します。

2. 派遣期日 令和5年1学期～令和6年2月末まで (※開催時期は各学校と相談の上、決定)
小中高等学校のいずれか計3校程度で実施。1回1クラス～2クラス程度(多い場合は応相談)。
基本の回数は、1回90分(*)×3回のアーティストによるワークショップを3日間行います。
*当該事業が同じ児童生徒に対し最低3回以上の授業を行う事を推奨しています。
1学年3クラス以上など人数が多い場合は、2クラスごとに時間割を分けて行うなど調整します。
詳しくは、実施決定後に打ち合わせを行い、相談して決めます。

3. 費用 アーティストにかかる交通費・宿泊費・謝金などは、全て文化庁の助成金により負担します。

4. 受託団体 NPO 法人 Japan Contemporary Dance Network (JCDN) 担当: 神前(コウサキ)
TEL075-361-4685 FAX075-361-6225 MAIL: jcdn@jcdn.org WEB: http://www.jcdn.org

5. 申込〆切 【2023年6月9日(金)】までに、4の受託団体までメールまたはFAXにて。

＜授業後の教員アンケートより＞

(児童生徒について) ●コロナ禍でも実施できた行事で全員参加できてよかった。全員が主役となれて充実した一日だった。楽しんで動けていました。●普段大人しい生徒らが笑顔で活動している姿がみられた。●学年の一体感がうまれた。●この学年の持つ活発さ、明るさが全面に出ていて、良い意味で全体がはじけていた。笑顔がはじけていた。普段大人しい子どももたくさん笑顔があった。良かった！！●自分を表現していてとても幸せそうでした。●多くの子どもたちが生き生きと活動していた。●とても意欲的に活動できていた。講師の方々の歩んできた人生についても聞いて、よい刺激となった。●何をするのかとドキドキワクワクであった。いい加減にする子もいると思ったが、彼らなりに何とか自分のパフォーマンスを演じていた。休憩したり参加しない生徒がいなかった。最後の静寂な時間が迎えられ、この学習は大成功で子供たちの心の中に入ったと思った。●音楽に合わせて子どもたちが自由に(思うままに)ダンスをする経験をする事ができて、子ども・教師ともに良い時間になった。(先生ご自身について)●言葉で促さなくても、自然に参加する子どもを見ることができ、自分にとって学びの時間になった。●道具を何も使うことなく、からだを使う事だけでこれだけ表現できることや、子どもたちとコミュニケーションを取れることに驚いた。●ダンスを通してこのような体験ができる事を初めて知ることができ、私自身とても新鮮で貴重な体験ができた。●年度当初に行くことで、学級がすごく良くなるように感じた。今回、体験した事を今後学級レクなどで活かしていきたい。●子どもたちの新たな一面を見ることが出来てとても充実した事業だった。●教師や私たちがこういう事業を知ることがもっともっと必要なんだなとあらためて感じさせてくれた。大人になっても学び続ける姿勢や知ることの重要性、挑戦することの偉大さを感じた。

＜同 児童生徒のアンケートより (小学2年生～中学生)＞

●自分を表現するために色々な仕方があって、これがダンスの良さなのだなぁと思った。●自分が普段やらないことをやって、自分ってこういうことができるんやと思った。●友だちじゃなくても気づけば一緒に踊っていて、普段知らない人と、いきなり何かをするということがないので、すごく嬉しかった。●みんな色んなことをしていた。やっぱり一人ひとりが違うんだなと思った。●こんなダンスもあるんだなと思った。ダンスをしていると心がワクワクしてきた。●いつも暗かった人がダンスをしている時は明るかったり、楽しそうだった。●ダンスのおかげで今まであいさつしなかった子もあいさつをするようになった。●個性的なダンスの先生たちとも話せてよかった。

実施希望調書（申し込み用紙）

学校名	立 学校		
所在地等	〒	TEL	FAX
	御担当者: Email		
学校長名		担当者名	
1	実施学年・学級数		
2	対象児童・生徒数	年生	クラス 名(男 人/女 人)
*3クラス以上の場合、時間をずらして実施するなど、応相談。			
3	実施日程(希望される時期などをお書きください。)		
4	実施希望理由、ほかコメント等あれば		
5	教育課程への当該事業の位置づけ		

(中日新聞 滋賀版 2021年7月7日)

プロが中学生に踊り指導
北大路中2年、体験ワークショップ

大津 ダンスを通して自己表現する力を高め、同級生たちとのつながりを深める授業

「ダンス体験ワークショップ」が六日、大津市におおの浜の県立武道館であった。市内の北大路中の二年生百



講師の指導を受けながら、コンテンポラリーダンスに挑戦する生徒たち。大津市におおの浜の県立武道館で

五人が、プロのダンサーから指導を受けた。文化庁の事業の一環で、委託を受けた京都市のNPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークが協力し、同校では二〇一八年から続けている。昨年は新型コロナウイルスの影響で中止になり、今回が三回目となった。

にどられずに自由に踊ることが特徴のコンテンポラリーダンスと呼ばれる踊りに挑戦。講師から振り付けを教わりながら、全身を柔らかく動かしたり、隣の生徒たちと息を合わせたりして踊った。

参加した楠田莉野さん(ミ)は「普段は踊ることはなく、みんなと一緒に協力して一つの踊りを作ることができて楽しかった」と話していた。(松田雄亮)

情報や感想をお寄せ下さい

Eメール
gotsu@chunichi.co.jp
中日新聞大津支局

中日新聞

滋賀

発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

2021年(令和3年)
7月7日(水)

■琉球新報 教育面リレーコラム『未来へいっぽにほ』

2017年4月～9月まで NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークの神前が連載を担当しました。(2017年6月23日)

身体はうそをつけない



神前 沙織 (NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク)



2011年度から文部科学省が子どもの表現力・創造力・コミュニケーション力を豊かにするための芸術体験事業を行っている。現代社会で子どもが生きる力をつける学習の一環として、美術、音楽、ダンスなどの専門家(アーティスト)が授業の中で、芸術表現のワークショップを行う。私は学校とアーティストのつなぎ役、それも創作ダンスを専門とするコーディネーターである。沖縄では2年前から沖縄市、那覇市、名護市、石垣市の計四校で実施した。

昨年度、那覇市の小学校で行った3日間の授業が記憶に新しい。思春期の6年生60余名、自我の芽生えが「恥ずかしい」気持ちになって現れる微妙な年齢だ。1日目は心と体をほぐすのに時間をかけ、2日目は大きく動かない、仲間の目を意識しすぎずに表現することに慣れてきて、3日目では一人一人の本来の表現が見えるようになった。個人差はあるが、少しずつ、いつの間にか普段の自分や周囲のしがらみ、関係性を意識せずに自分を表現できるようになる。ともすると閉じられていた何かが開かれる。そういう発見が随所に見られた。

この時の担任は、そうしたダンスの可能性を見抜いてこう話した。「身体はうそをつけない。ノートも机も、隠すものが何もないから、体一つで勝負しないといけない。他の教科と違ってすぐ数値化できるものじゃないけれど、それ以上の人間力が身に付くと思う」

SNSが普及し、子どもたちが小さな機械に振り回されダイナミクスを失いつつあるという。そういう時代だからこそ、人それぞれの原石が磨かれる機会がたくさんあってほしい。

ちなみに今年度も当事業を行うことになった。現在、沖縄県教育委員会を通じて参加校を公募している。

琉球新報 2017年6月23日